

東京環状

TOKYO EMOTION

Z世代の“まち環り”

Magazine for Generation Z

時代が変わる中、変化を遂げている街。
多様性が定着して、さまざまなカルチャーが交差する街。
ひとりひとりの独自性とライフスタイルが進化し続ける街。

そんな街を歩いて、街の声に耳を傾けてみよう。
この街に向き合い、寄り添い、少し寄り道しながら。

Z世代の〈まち環り〉

情報が常に手元にある今の時代を生きる体現者たちが
東京の街を実際に歩いて何を感じるのか。
そして、時代の変化により表情を変える街の中にある
過去・現在・未来を立教大学権ゼミ生はどう捉えるのか。

新しい出会いや発見を楽しむZ世代とともに
東京の街をフィールドワークしよう。

足元はニューバランス。

まずは、東京ゼロ地点、日本橋から。

東京環状

TOKYO EMOTION

CONTENTS

Prologue

00 プロローグ

02 権ゼミからの提案
Z世代の「まち環り」

03 東京環状について
What is TOKYO EMOTION?

東京案内

04 東京ゼロ地点からスタート
日本橋

06 コーヒーやアートだけじゃない
人情溢れる下町

清澄白河

12 渋谷のもう一つの顔
奥渋谷

18 東京っぽくない都区内の休憩場所
池尻大橋

24 文化と心の拠り所
高円寺

30 編集後記
Editor's Note

32 対談
「CROSS × TALK」

Cover
NOBUTAKA SAKA
YAHIRO KOBAYASHI

Models & Editors
NOBUTAKA SAKA
YAHIRO KOBAYASHI
MIYU YOSHIKAWA
MIDORI FUKAYA
RISAKO HORIOKA

UTA FUJIOKA
HATSUNE UMEMURA
HARUKA ONUKI
AOI KUROKI
KIRI NAKAYAMA

MANAKA KATO
RISA OGAWA
REIMI WADA
TOKO ABE
TAKU KOBAYASHI

HAYURU YAMAMOTO
KURUMI OZAWA
KOSUKE SASAKI
RIKO TAGAWA
EKO TANAKA
YUMEJI TSUBOYA

Z世代の「まち環^{めぐ}り」

“ TOKYO 温故知新 ”

Reノベーションとシェアを学ぶ立教大学 権ゼミが「温故知新」をテーマに、「まち歩き」と「フィールドワーク」を融合したZ世代のライフスタイルを提案。スマホをしまい、自分たちの感情 / 感性を信じて東京を環る。更新を重ねるその街を、むしろ遡行する。街という「古典 / 作品 (Classic)」を自分たちの力で読み解いてみよう。流行に依存しない「本物」を感じ取り、それをシェアして人生に書き込もう。



ゼミ公式 HP



ゼミ公式 Instagram

東京環状について

権ゼミからの提案



立教大学 権 安理ゼミナール
コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科
～人と地域を、次代につなぐ。～

What is **TOKYO EMOTION?**

1

この ZINE は、Z 世代による「まち環り」の冊子である。見て聞いて味わって、感情を揺さぶられたモノ・コト・ヒトを「文・字」にした情報誌である。他方でそれは、「まち」を表象した Photo Collection でもある。「まち」に対する感情が写真という「物・像」として布置されているので、審美的なインテリアにもなる。

2

この ZINE は、Z 世代のビルドゥングスロマン(教養小説)である。学生が「まち」を環ってさまざまな経験をすることで教養を積み、成長・変貌していく物語を示す。他方でそれは、「まち」を素材にした Educational Material でもある。学生目線のストーリーのなかに学術的なトピックが布置されているので、実証的なテキストにもなる。

ZINE の企画は渋谷の公園という公共空間で、立教大学の権ゼミとニューバランスジャパン (NB) のスタッフが偶然出会うことから始まった。既存の資源を活用した、リノベーションとシェアによるパブリックデザインを研究する権ゼミ。Shifted Collection、すなわち元々存在していたものに変化を与えるというコンセプトを持った製品を作る NB。コラボしたら何ができるのか。

「まち」を探究した「世界一オシャレな教科書」を作ろう。学生のこの言葉から企画が本格化した。テーマはZ世代による「東京・温故知新」。「まち」というリアルを大切にしたい。存在し続けるべきものを見極めたい。再構築された形で現代に蘇っている、本当に価値のあるものをシェアしたい。

学生がNBのシューズや服を身に纏って「まち」を環った。そして、移ろいゆく現象の背後にあって変わらない実在 (Reality) を、あるいはレビューや流行に左右されない本物 (Authentic) を、Z世代なりに感じて撮って書いて作ったのが、この『東京環状(TOKYO EMOTION)』である。



「東京ゼロ地点」から
スタート

日本橋

Nihonbashi

学生には疎遠なおとなの街。でもそこには、
Z世代を惹きつける「何か」が確かにあった。

1

今日、日本橋へ行く。
の候補に日本橋を
考えたことであ
るだろうか。「古き良き」を感じ
させる日本橋という街は、僕
たちZ世代にとっては未開拓
だ。街と橋の双方の名である日
本橋。今回は、そんな街の「橋」
に足を運んでみた。そこで何を
発見し、感じるができるの
だろうか。



New
Balance 327!

街、ノゾク。

橋

の周辺には石碑が多く、写真を撮り
合う観光客の姿もあった。その一つ
が「日本国道路元標」。「江戸幕府によ
り五街道の起点として定められました」とある。
道路で見かける「東京まで〇km」は、実は日本橋か
らの距離を表している。「ここはまさに」「東京ゼロ
地点」。日本と東京の真ん中だと思えば、ワクワク
する。広大な空の下に佇む日本橋は、人々が「何か
を始めること」を象徴しているかのようだ。そし
てまた、僕たちの「まち環めぐり」のスタート地
点も、「日本橋。東京はアップデイトを重ねて
いるが、日本橋は今も昔も変わらずに、日本の中
心として存在し続けている。」

2



橋

の始点、中心、終点にはレトロな雰囲気
の街灯が立っている。両端には獅子、中心には麒麟の像が君臨する。外側を
見据えた獅子は東京都の紋章を持ち、日本橋だけではなく、
東京都を守っている。中心の街灯には、神獣である麒麟が鎮座する。
威厳のある翼を背負った麒麟は、今にも空へ飛び立ちそう。そんな
気配を感じてしまう。



「日本橋でクラシックに還る。」



橋名板の表記には、
平仮名と漢字がある。



クラシックって何だろう？

本物って何だろう？

獅

子や麒麟から、
ふと足元に視線
を落とすと石畳
が敷かれていた。他の街では
見られないものが、ここには
沢山あるから面白い。周りの
風景は移りゆくのに、日本
橋が象徴する「何か」は昔も
今も変わらない。そんなこと
を考えながらこの橋を渡っ
てみると、おとなの街に舞い
降りた僕が、ちよっとだけ誇
らしく感じられた。



清澄白河

KYOSUMI SHIRAKAWA

コーヒーやアートだけじゃない

人情溢れる下町

清澄白河



fukadaso CAFE

建てられた当時は珍しかった鉄骨と家具の温もりがマッチしたレトロモダンな空間。定休日はシェアスペースとして貸し出すことも。

駅

のA3出口から清澄通りを左へ進むと、錆びたトタンの外壁が特徴の建物がそびえ立つ。トタンの古臭い感じがせず、薄い水色の見た目は爽やかな印象さえ受けた。そこは築六〇年のアパート兼倉庫だった「深田荘」をリノベーションした「fukadaso」。五つの異なるお店が「入居」するこの場所の101号室は「fukadaso CAFE」。深田荘という響きから、昔ながらの木造で六畳一間のアパートを想像してしまう。でも店内に入ってみると、想像とは対照的に広々とした空間がそこにはあった。天井が高く、少し無機質な鉄骨からは元倉庫らしさが感じられる。インテリアに目を向けると、真っ白な壁や温かみのある木目調の家具からはどこか家らしさが感じられる。初めて訪れたはずなのに、なぜかそんな感じがしない。



今 ではコーヒーやアートで若者に大人気の街。だが意外にも、清澄白河駅ができたのはたった二〇年ほど前で、駅の開業前は陸の孤島と呼ばれたこともあったそうだ。しかし東京都現代美術館が開館して、シャッター商店街に若いアーティストがアトリエを開くようになると徐々に注目が集まる。ブルーボトルコーヒーの日本一号店の開店とともに、この街の人氣は爆発的に高まった。

街を歩いていると、お店や建物の天井が高いことに気づく。この一帯が、かつて材木を保管していた倉庫が多かったことの名残らしい。使われなくなった倉庫をおしゃれなカフェやアートギャラリーにリノベーションしているのだ。そのような空間を求めて清澄白河へ足を運ぶ人も増えている。大学のゼミでの勉強内容とあまりにびつたりな街だと直感してときめいてしまった。

今回はそんな清澄白河の街を探索し、そこで出会った三つのお店を紹介。それぞれのこだわりはもちろん、地域に根づいているコミュニティや文化を継承しようと活動している方々のリアルな声にも注目してほしい。

とりあえず注文してレザールのソファに腰掛ける。沈み込むくらいフカフカで、思わず靴を脱いですぐにも横になりたくなる。ふと「ここが家ではないことを思い出してやめた。危ないところだった。注文していたカフエラとチーズケーキが運ばれてくる。カフエラを口にすると、ほんのりとした温かさ、コーヒーの香り、ミルクのまろやかさが口いっぱい広がる。それにしても、今日もまたカフエラテを選んでしまった。おしゃれなカフェでブラックコーヒーを嗜む大人に憧れながらも、ブラックコーヒーへの挑戦を先延ばしにしている。

人生の酸い甘いも経験したら、コーヒーの苦さも味わえるようになるのだろうか。そんなことを思いながらも、大好きなチーズケーキを頼める。濃厚だけれど重すぎないシンプルな甘さで、求めているチーズケーキそのものだった。美味しくて、五分もしないうちに食べきってしまった。どうしよう。もう少し長居したいから、勇気を出してお店の人に話しかけてみようかな。カフェの店長兼fukadasoのオーナー、佐藤奈美さんにお話を伺ってみた。おじい様が建てた深田荘を引き継いだのが佐藤さん。

二〇一一年の東日本大震災だった。古い建物だったこともあり、地震によって外壁が崩れてしまったそうだ。「思い切って壊して新しいビルを建ててしまおうか、それともリノベーションして使っていくか」清澄白河は大規模な再開発が行われておらず、お寺などの歴史ある建物がたくさんある。高齢者も多く住むこの地域では、当時の雰囲気を残せるリノベーションの方が街に溶け込むと佐藤さんは考えた。

「古いけれどちょっと変わった元がけしたくて」「ここが地域のランドマークとして機能しつつも、地域に新しい風を吹き込むビジョンを描いていた。」「一階にはカフェ、上の階には他のお店が入るのがいいということで、今の形になりました」元々はテナントを募集していたが、そのプロセスは予想以上に複雑でうまくまとまらなかった。それならば自分たちでやってみよう、佐藤さん自らカフェの運営を手がけることになった。



AREA MAP

今回の取材先

- ✓ fukadaso CAFE
- ✓ リカシツ
- ✓ GLASS-LAB





関谷理化株式会社は日本橋近くに本社が位置する。そこではピーカーや試験管などの理化学ガラス製品を卸販売してきたが、理化学ガラス専門職人の高齢化が進み、後継者不足という問題を抱えている。その解決策として考えられたのが、理科の器具を一般の人にも使ってもらえるように工夫すること。そんな製品を作ることで職人の仕事が増えて業界が元気になる、後継者問題解決の糸口になるのではないかと思い、リカシツをオープンした。

当初は製品を並べるだけで本当に売れるのか不安もあったと関谷さんは語る。「僕の考え方として、まずやってみてダメだったらやめる。そしてやり方を変えてやってみる…の繰り返しが必要。色んな運と縁があって二〇一五年から現在まで八年間続けられています」

「考えるより行動」という考え方の通り、この空間に在ると、既成の概念にとらわれず発想を自由にしてくれる気がする。

物と意思の 交差点

fukadaso CAFEは、空間デザインも特徴的だ。そのこだわりの一つに尋ねてみた。「席数が（お店の）広さに対しては少ないんですよ。普通のカフェだと多分、倍くらい席を作るんですけど、うちはかなり少なくしているの、席と席の間隔が広がってますね」家具は古き良き雰囲気重視という。「アンティーク調のものが多い。今どきらしくならないようにしています」自らDIYすることもある。

佐藤さんのこだわりが詰まったfukadaso CAFE。大切にされているのは、「家族の思い」と街の歴史ということだった。「建て替への方が最初にお金がかかるんですけど、その後は楽なんです。リノベーションはそこを直し続けることが必要なので手間がかかります」それでも、リノベーションを選んだ背景には、「家族の強い思いがあった」。「新しく物を作ること」はすぐできる。だけど古い物を残したい、母の思い出が詰まったこの建物を残したいという思いが、家族で強かったみたいという「古き良き「物」と「家族の「思い」が交差して、街の歴史とともに息づいている。

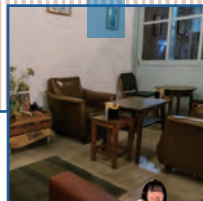
リカシツのユニークな製品のアイデアはどのように生まれるのか聞いてみた。

「購入したお客さんの製品の使い方を見たいのでSNSでハッシュタグをつけて投稿してもらおうようにお願いしていたんですよ。後から検索してみると、お家で五徳を使ってコーヒードリッパーに利用していたりする。そういうアイデアを見て再現して…みたいなことを繰り返してましたね」

リカシツという場所を設けたことで、お客さんとの交流が生まれ、そこからまた新たな製品が生み出されているのだ。目的を持って買い物に出かけるのもいいが、外観につられてふとお店に立ち寄り、理化学ガラスを眺めながら日常生活のどの場面でも使うことができるのか、無限の可能性に想像を膨らませることも楽しそう。

お店を持つにあたって、なぜ清澄白河の街を選んだのか聞いてみた。

「清澄白河はチェーン店が少ないので面白い。自分のお店を持っている人が多いので、お店をやっている者どうし、来てくれたら行くみたいな関係性があります。そういうのって、チェーン店だと難しいかな。この前来てくれたし、世話になったから…みたいな繰り返しやっぱ下町の文化なのかなという感じがします」



fukadaso CAFE

〒135-0023
東京都江東区平野 1-9-7
OPEN：月/木/土/日
13:00～18:00
金 13:00～21:30
定休日：火、水
Instagram：fukadasocafe

そんな関谷さんは、この地域にある深川蒸留所の運営代表でもある。そこにはリカシツの理化学ガラスを応用して作られた蒸留器もある。こちらについても尋ねてみた。

深川蒸留所は、クラフトジンの蒸留所として二〇一三年三月にオープンした。ここで作られるジン「FUE K I」は、木材流通で栄えたかつての深川を連想させるヒバの香りが特徴的だ。ヒバは古くから建材として利用されており、ヒノキよりも木の香りが強い。おすすめの「ジンニック」という飲み方を試してみる。確かに木の香りや自然の奥深い香りに包まれ、まるで森の中にいるような感覚に浸る。また、FUE K Iのラベルは江戸三大祭の一つである地元の水掛け祭りから着想を得たものだ。白と黒のコントラストが特徴的で、水しぶきの躍動感が目を引く。ほかにも、近くのカフェで出たコーヒーの出し殻を利用したジンや、季節の花を使ったものがあり、関谷さんのクラフトジンにかける熱意や地域愛が伝わる。



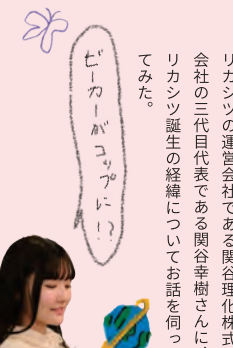
クラフトジンの製造に欠かせない蒸留器は、リカシツの製品と同様に関谷さんが理化学ガラスの職人とともに作り上げたものだ。理科器具がクラフトジン製造用の蒸留器という装置になったと思うと面白い。「理化学の世界では蒸留器はビュールな装置だが、今は新しい蒸留器の開発も行っている。それを使って新しいお酒が造れば、理化学ガラス職人の新しい仕事づくりにつながる」次々と新しいことにチャレンジする関谷さんが、つねに職人を大切に思う姿勢の根底には、生まれ育った下町の人情が根づいているのだろう。

リカシツ



fukadasoの1001号室にあるCAFEを出て、まさにアパートの隣部屋の102号室に足をを進めてみる。お店の看板になっているフラスコの口の中には、なぜか「リ」とだけ書かれている。それを見ただけではカフエなのか雑貨屋さんのか想像もつかない。その正体が気になり、ガラス窓から店内を覗いてみると、暖色の明かりの下に幾つものガラス製品が並べられている。お店の名前は「リカシツ」という不思議なものだった。

「理科」と聞くと、少し身構えてしまう自分もいる。でも実験は好き。ときめきを感じてしまった。少し緊張しながらも、勇気を出して扉を開けてみる。中に入ると、リカシツというだけあって、理科の実験で馴染みのあるピーカーやフラスコが並べられており、どこか懐かしい気持ちにさせられる。目の前のピーカーを手にとってみると、なぜか取っ手がついていることに気がついた。「コップ」として使用するために加工されているようだ。



KIYOSUMI SHIRAKAWA AREA

リカシツ

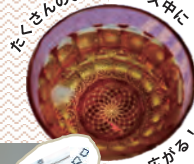
〒135-0023
東京都江東区平野 1-9-7 fukadaso102
TEL：03-3641-8891
OPEN：13:00-17:00
定休日：月、火、水
Instagram：rikashitsu



全国でたった10人が持つ切子技術

リ カシツの向かいに、綺麗なガラスが飾られた工場がある。そこはGLASS-LABというガラス加工専門工場。GLASS-LABは一九五〇年にお祖父様の椎名三男さんが創業した椎名硝子加工所の流れを汲み、ガラス加工をB to C（一般消費者向け）で展開している。ガラスの輝きに誘われて中へ入っていると、創業当時から変わっていないというお手製の研磨機がきびきびと音を立てて動いている。古くからこの地域に住む代表取締役兼CEOの椎名隆行さんにお話を伺った。GLASS-LABの特色は、ガラスに面を作る平切子の技法や、砂を圧縮空気で拭き当てる、すりガラス状にするサンドブラストという技法。写真は東京都知事賞を受賞した商品で、水を入れるとガラスの反射で絵柄がじわじわと全体に広がる。これを見たとき思わず「おお」と子どものように興奮してしまっ

水を注いでみると...



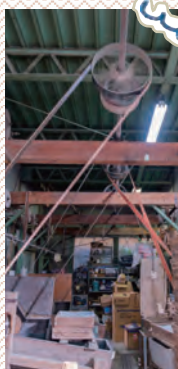
東京都知事賞受賞のオリジナル江戸切子

大手企業でサラリーマンとして働いていた椎名さん。起業のきっかけは、会社の先輩が辞めて起業をしていく背中を見てきたこと。そして何より恩師の方が起業する際に、椎名硝子加工所の彫刻技術を活用した名入りのガラスを贈ったところ、喜んでもらった経験が大きかったそう。二〇一四年に会社を辞め、起業に向けて準備していたときに、ブルーボトルコーヒー日本一号店が清澄白河にオープンすると聞いたという。地元の人々の街だったこの地に、注目が集まることとなった。その頃からGLASS-LABでは、誰でも参加できるガラス加工の工場見学・体験をスタートさせたり自社製品を売り出すなど、事業を拡大させている。



GLASS-LAB 代表取締役兼 CEO 椎名隆行さん

すごい！



創業以来使用している研磨機

職人さんとお客をつなぐ役割

G LASS-LABで扱っている平切子のような技術を持つ職人が少なくなっている理由について、椎名さんは「シンプルに稼げないから」と話す。さらには仕事量が減り、職人の高齢化や後継者不足が問題となっている。また、ガラス加工という業種が特殊なためこの工場で出来る工程で、その対価が一般消費者にとって分かりにくい。そこで椎名さんはプロデューサーとなり、職人ならではの技術を活用した新しい物を開発したり、職人とお客様を仲介し、よりスムーズにコミュニケーションができるよう、両者のいいところ、表現したいことを「翻訳」するようになったという。椎名硝子の技術を世に、そして次代に広めていくための重要な役割である。

ガラスの端材を使った万華鏡制作

GLASS-LABでできる体験は全部で3つ。私は友人と万華鏡制作を体験してみた。この体験で興味深いのは、ガラス加工で出てきた端材を万華鏡の種にしているという点。一見価値がないように見える物に新たな価値をつける。まさに物のリノベーションだ。



♡いいね！

何種類もあるカラフルな端材をどう使おうか迷ってしまう。逆に何も考えず、好きなように入れていくと、意外と良いものになる。完成後、万華鏡を覗くとキラキラとした幻想的な世界が広がっていた。

#GLASS-LAB #万華鏡体験 #ガラス加工の端材 #リノベーション

万華鏡制作体験

1時間・1個 3,500円
ガラス加工工場見学付き

KIYOSUMI SHIRAKAWA AREA

さらに、旧住民と 新住民をつなぐ役割も。

清 澄白河が人気になることで新しいマンションが増えている。マンションによっては、規約に町会費支払いの項目がなく、回覧板が回ってこないところもあるらしい。ここは古い地域なので、新住民には地域コミュニティに参加することのハードルは高い。他方で、地元で約四〇〇年続く水掛け祭りでは、お神輿の担ぎ手が三万人必要であるのに、少子化によって担い手不足が懸念されている。そこで動いたのが椎名さん。二〇一六年から神輿総代と新住民が交わるトークイベントを開催した。



GLASS-LAB

〒135-0023
東京都江東区平野 1-13-11

TEL : 03-6318-9407

OPEN : 10:00~17:00
木 10:00~12:00
土 / 日 10:00~15:00

定休日 : 水

Instagram : glasslab417



その目的は、新旧住民が交わる機会を増やすこと。お神輿に関わる人々を増やすことの二つ。カフェを貸し切りにしてイベントを開催すると、約三〇人〜四〇人の席が毎回満席。新住民の知り合いが一人増え、挨拶を交わすようになったことに対して、椎名さんは「すごく心地が良かった」と嬉しさを感じている。古くからこの地に住む人が歩み寄り、新しい人もそれに応える。新旧両面の顔を持つ清澄白河らしいエピソードだ。

愛する地域と技術を後世へつなぐ。

現 代アートと下町情緒が調和した、コーヒーの香りが漂う街、清澄白河。

行く前は、なんとなくお洒落な街、という印象だった。

実際に足を運んで「まち環り」をしてみると、人と人のつながり、そして人から人へと継承する技術や伝統を大切にしている街だということを強く感じた。

そこにあるのは、古き良き「物」を大切に守りながらも、新しいエッセンスを加えて未来へとつなぎ、物語を紡いでいく思いの環(わ)。

私たちの足で街を環って、その思いを私たちの世代の記憶にも書き込もう。



奥渋 OKUSHIBU



ROSTRO



作品としてのコーヒー

井の頭通りをNHKを過ぎた辺りで脇道に入ると喫茶 ROSTRO にたどり着く。テラス席がまず目に入り、犬の散歩途中にコーヒーを楽しむ人や談笑する人の姿があった。店内に足を踏み入れてみる。テンポよく挽かれるコーヒー豆の音と、苦くて香ばしい大人の香りに導かれてカウンターに進むと、見たことのない形をしたコーヒーマシンがあった。BGMには昭和っぽい音楽が流れ、まるでこのお店だけ昭和のままだが止まってしまったような感じがした。ここで、僕は唯一無二の不思議な体験をするようになる。

カウンター席に座ると、手作りの感ある小さなアルバムのようなものがあつた。開いてみると「店内喫茶の楽しみ方」とあり、店員さんに「理想の一杯をオーダー」する様子が描かれている。そう、ここは「メニューのないコーヒー」店で、頼むものはつねに「理想の一杯」なのである。ブルーマウンテン、モカ、カペララテ：あらかじめ決まった商品を頼むのではなく、「今の自分にぴったり」のコーヒーをいただける場所なのだ。だからだろうか、他のカフェよりも早いタイミングで店員さんがやってきた。店員：「今日はどのようなコーヒーにしていますか？」

（といわれても）どう答えるべきかわからないので…）

「ホットコーヒーを」と無難な返答をした。

店員：「チョココレート風味とキャラメル風味のどちらがよろしいでしょうか？」

（フレバーを詳しく聞かれて驚くとともに、どんなコーヒーができあがるのだろうか？と胸を躍らせるが、考えたこともないので、少し困惑してしまふ）

店員さんは僕がコーヒーに詳しくないことに気がついたのか話題を変えて、なぜか今の気分を聞いてくれた。

カフェにきたのに世間話をしてることに少し困惑したが、会話が進むうちに、徐々に緊張がほぐれていく。

「チョココレート風味にします」さっきはいえなかった言葉が出た。

店員：「香りはいかがでしたしょうか？」

（今度は香り…）

店員：「ベリーのようなフレッシュで果実味のあるものや、ローストしたナッツのような香りがあります」

僕の想像を超える丁寧な説明を前にして、人生で一度も聞いたことのないセリフが口から出てきた。

「ローストしたナッツのような感じで」

（ここで、オーダーが終了。）

渋谷のもう一つの顔



#outfit of the day



渋谷スクランブル交差点を過ぎて井の頭通りに入り、しばらく進んでいくと徐々にチェーン店の看板の姿が減り、落ち着いた雰囲気のある場所になってくる。少し見上げると、電柱に「奥渋」と書かれた黄色い旗が並んでいた。いつの間にか奥渋（おくしぶ）に辿り着いたみたいだ。若者カルチャーや最新のトレンドが集まる渋谷中心部とは趣が異なり、古民家カフェや小さなアートギャラリー、暖簾の掛かった商店などがある。立ち寄ってみたくなるお店が続く、街を歩くだけで心躍る。今回は渋谷のもう一つの「顔」といえる奥渋にある三つのお店を紹介する。どのお店も、唯一無二のスタイルとコンセプトを持っている。

渋谷

喫茶 ROSTRO

〒151-0063
東京都渋谷区富ヶ谷 1-14-20
サウスピア 1F
平日 8:00-20:00
火 8:00-17:30（スタンドのみ営業）
土日祝 8:00-20:00
定休日：不定休

FUGLEN TOKYO

〒151-0063
東京都渋谷区富ヶ谷 1-16-11
月 - 火 7:00-22:00（L.O. 21:30）
水 - 日 7:00-25:00（L.O. 24:30）
定休日：不定休

SHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERS

〒150-0047
東京都渋谷区神山町 17-3 テラス神山 1F
11:00-21:00
定休日：不定休



コーヒーができあがるまでの作業工程を間近でじっくりと見ることもできた。唯一無二のマイコーヒー。特殊なオーダーということではなく、会話を媒介にして、今の僕にマッチするように作られたものだ。このコーヒーには「一度と出会えないかもしれない」という儚さを感じつつも口に運んでみた。オーダー通りのナッツの香りが鼻を抜ける。まろやかな味わいと柔らかな甘さが口全体を優しく包み込む。会話のなかから生まれたものだから、いつもより味わって飲むことができた気がする。

僕は「メニューがデフォルトで当たり前のものだ」と思っている。けれども「メニューって何？」と改めて考えてみた。それがあって便利だけれど、制限されたものなのからの選択を強いられる、ないし自由になるけれど、そこには迷いや戸惑いが生じるだろう。デジタル社会を生きている2世代の僕たちは、いつもならわからないことがあれば、すぐにスマホで検索して、でも喫茶 ROSTROでは、店員さんと顔を合わせて会話をしながら、コーヒーを共作していたのかもしれない。商品としてのコーヒーを飲むのではなく、コーヒーという作品を体験・体感する。僕らの日常では得難い、アナログな充実感が「そこ」には確かにあった。

顔の見える会話から生まれるコーヒー

「これは僕らが知っているカフェではない。同じコーヒーでもチェーン店のそれとは全く異なる。経営者の清水さんは次のような思いを語ってくれた。『氣遣い・氣配り・氣つき、そのなかで、ひとりひとりに思いっきり向き合って理想の一杯を作りたい』そんな一杯への感情は、ROSTROを通常の飲食店から解放するかのようだ。僕たちの仕事は、お客さんが来る前よりも来た後の方が元氣になるとか、また頑張ろうみたいになること。お客さんをROSTROから、世の中に送り返して社会貢献をしてもらう使命がある」

ROSTROのこだわり、それは「お客さんだけの珈琲を提供すること。好みの風味、香り、雰囲気丁寧に関き、その人のその瞬間に合わせたコーヒーを提供する。店内には、コンビニで見かけるようなコーヒーマシンは置いていない。チェーン店ではありえないやり方に驚いた。デジタル社会で提供するコーヒーはスピード重視だ。昔は不便でも、お湯を沸かしてコーヒーを煎って飲んでたのに、今は「同じ質のものを素早く提供すること」が追求される。そんな社会だからこそ、会話を大切にするカフェを経営し、会話を通じてできあがる一杯を清水さんは大事にする。ROSTROでの会話は、唯一無二のコーヒーを作ることはもちろん、人をリメイクし、社会をリニューアルする原動力となっているのかもしれない。

そう思うと店名にも納得がいく。『ROSTRO』はスペイン語で「顔」という意味。人生にはいろんな顔があっていいはずだ。顔を見て会話し、それが思い出となる。でも、スマホひとつで何でもオーダーできるのが僕らの時代。ROSTROで顔を突き合わせた会話を楽しみながら、僕らだけに見せてくれる顔を持つコーヒーを体験してみよう。このコーヒーは、バリスタと一緒に仕事（work）から生まれる作品（work）なのだ。



ノルウェーカルチャーを東京でー



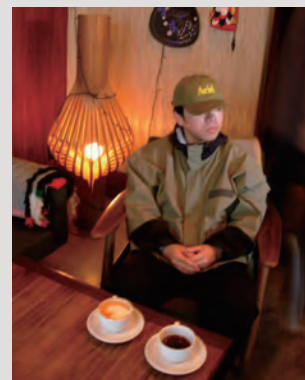
店内に足を踏み入れると、オレンジ色に近い照明が暖かな雰囲気を感じさせる。カウンターでホットコーヒーをオーダーした後、混雑したなかで席を探していると、カフェには珍しいローテーブルとリビングにあるようなソファが目に入る。他のお客さんとの距離の近さに気まずさを感じつつ、苦味を出して席につき一息、コーヒーを口に運ぶと、舌先よりも酸味を感じた。この間にも次から次へとお客さんが来店して、スツッフと軽く会話をしている。このカフェは日常的に利用するお客さんが多いようだ。喫茶ROSTROとは全く違うけれど、FUGLEN TOKYOにも普通のカフェとは異なる独特の雰囲気があった。僕が感じたその雰囲気の謎を解き明かしてくれたのは、「空間」と「文化」という二つのキーワード。店員さんにお話を伺うことで、何となく感じたことが明確になっていった。

#Today's coffee

空間の工夫



ローテーブルとソファがあるけれど、僕はおはあちゃんの家みたいなのだ。でも置いてあるのはノルウェーのヴィンテージデザインの家具やリプロダクトの製品だという。確かにローテーブルを見ると、その深く濃い色は独特。僕らがよく知っているIKEAのものは明るい色合いの印象なので、それとは異なっている。横の壁紙はクリーム色だけれど畳のような質感があり、背面の木製の棚はこげ茶色。少し大きめで陶器のような食器が飾ってある。そういったところに日本家庭の要素を感じ、親近感が湧いたのかもしれない。店内に入ったときの少し気まずい空気感は、いつの間にか、おはあちゃんの家に帰ったかのような安心感に変わっていた。



コーヒーカルチャー

FUGLEN TOKYOは、二〇二一年に東京に進出し、ノルウェーのコーヒーカルチャーを持ち込んだ。でも僕らはノルウェーと聞いて「コーヒーを思い浮かべることはない。少し不思議に思いながら店員さんのお話を耳を傾けた。東京にはほとんど駅ごとにカフェがあり、世界的に見ても「すごいコーヒーシティ」だけれどカルチャーの面ではまだまだ浸透しておらず、発展途上だという。というのも、東京の人にとってカフェは目的があって行くところであり、コーヒーはあくまでもそこで売られている商品であるからだと試験勉強や仕事をすため、友人と話すためにカフェを利用して、場所代を払うかのようにはコーヒーをオーダーする。人気があるお店も多いけれど、例えばSNSでの「時の流行」によって話題となり、栄え廃れていく。美味しいコーヒーも有名なカフェももちろんたくさんあるけれど、僕らのような素人にはハードルが高かったりする。コーヒーはあくまでも手段や商品であり、あるいは「通」の世界にあるものなのだ。

でもノルウェーではカフェでコーヒーを飲む文化が浸透し、日常生活の一部になっている。例えば毎日のルーティンでカフェに立ち寄り、コーヒー片手に店員さんと話したり、本を読んだりしながら自分の時間を過ごすようにしている。ノルウェーでも東京でも一番よく出るコーヒーは「Today's coffee」。マシンで抽出したコーヒーを日替わりで楽しめる。常連さんは豆や味は気にせず、「Today's coffee」を注文するらしい。でも面白いのは、それは逆にコーヒーのクオリティが高く、美味いのが当たり前だからだという。

僕はここで、さっき感じた酸味を思い出して、ノルウェーのコーヒーの特徴を聞いてみた。「豆の焙煎はノルディッククローズドという浅煎りの手法なんです」と店員さんが説明してくれる。この手法は、豆が本持つ果実味を最大限に活かした焙煎だという。日本人は酸味の強いコーヒーよりも苦みのある味を好む傾向にある。でも、ノルウェーでは酸味と甘味のバランスを重視するようだ。酸と聞くとマイナスなイメージをもってしまう僕に、店員さんはむしろそれを「フルティ」と表現することを教えてくれた。確かに酸味が引いた後に、豆本来の甘味が後から追いかけてくる感じだった。僕には難しい味の世界観だけれど、あの酸味、いやフルティなテイストにはそんなこだわりがあったのだ。

でもやはりノルウェーではコーヒーは生活の一部。カジュアルなこのこだわりがあり、それが当たり前のようになら生活のなかで溶け込んでいる。日本に置き換えるなら、お茶を飲む感覚で、ノルウェーの人々はカフェでコーヒーを楽しむらしい。その想いのなかに、ノルウェーという国の表情を文化として感じる事ができるのが、このFUGLEN TOKYOなのかもしれない。



レトロだけど新しい空間

ROSTROの数メートル先から北欧の香りが風に乘ってやってくる。FUGLEN TOKYOはノルウェー発祥のカフェである。「ノルウェースタイルのコーヒー」を体験したのとは、オフィス街にボツンとたたずむ「昭和の民家」のようなお店。赤い円のマークが映えていて、その赤に包まれた白いアジアンは今にも飛び立ちそう。アジアンは世界最長飛行距離の鳥で、各国の港町に立ち寄り、その土地の良いエネルギーを吸収して、さらに次の土地へと旅する。渡り鳥のように生きて行きたいという思いが込められているようだ。

お店の写真を撮影する人が多い。外国語が飛び交うテラス席では、海外に行ったような気分になる。ガラスの引き戸から店内を覗くと、とても賑やかそうに見える。カウンターでは会話が交わされているようだ。



OKUSHIBU AREA

SHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERS



こんなこだわりがあるユニークな書店だけれど、そのロールモデルとなったのはなんとベーカーリー。「奥で作って、お店で売る。作り手と売り手。そして買い手がお互いを身近に感じられるような構造にしたい」パン屋さんみたいな本屋さん。そう思うと、正面の大きな窓、奥が見える窓、ユニークな本棚にすくなく納得ができた。

古着×本



店内を歩いていると、個性的な古着やおしゃれな雑貨が置いてあるのに気づく。書店なのに本以外のものが並んでいることに少し驚いたが、そこには現実的な理由と理想論の双方が関係しているという。本は洋服や雑貨と比べると利益率が低いから、本だけでなく、古着や雑貨のセレクトにもこだわっている。「本が周りにある生活をイメージした古着っていいの考えながら選んでいます」SPBSは本という商品を売るだけではない。本とともにライフスタイルも提供しているのだ。

ここで再び視線を本棚に向けて、ポップの一枚一枚が手作業で書かれていることに気がついた。この本棚の本も店員が選出しているため、ポップを見ただけで本一冊に対する熱意がヒシヒシと伝わってくる。古着から入ったお客さんが偶然書店の方に来、書棚にあるベストセラーとは異なる本を手に入る。こんな偶然が「必然化」されている空間なのかもしれない。

OKUSHIBU AREA

“SPBS”

こだわりのカフェがあった奥浜には、こだわりの書店も存在する。その書店は、SHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERS。ちょうど北欧のコーヒーの香りがかすかに感じられる辺り、二つのお店と同様に井の頭通りから少し小道にそれた場所にある。書店の前に立つと、まずはその大きなガラス窓に圧倒される。書店というよりもアパレルショップのように感じた。店の中に入ると、まず目に入ってくるのが真っ白な本棚で、本棚ごとに形が異なっている。あるものはS字を描き、あるものは正方形ベースの形。「本」が売られているはずのお店なのに、「本棚」を見ているだけでワクワク感がとまらない。色々と秘密が知りたくなる。今回は広報の田村さんにお話を聞くことができた。



田村さんおすすめ



SPBSのこだわりは、もしかすると顔というキーワードで考えることができるかもしれない。大きなガラス窓から店内にいる人の顔が見える。店内からは奥浜の街を歩く人の顔が見える。編集部はガラス越しにお客さんの顔を、お客さんは編集部で仕事をしている人の顔を見ることが出来る。書棚に並んだ本の顔を見ながら、そんなことを感じた。



浜

谷は僕たちZ世代には既知の領域。だからこそ、僕は「浜谷っぽくない浜谷」を探して「まち環り」を試みた。その行き着いた先が奥浜の街。奥浜には、Z世代の僕たちにとってあまり馴染みのない、「作品」や「物」へのこだわりがあった。顔という名のついた喫茶店には作品としてのコーヒーがある。ノルウェーのコーヒーは単なる商品ではなく、文化を背負ったノルウェーの顔でもあった。そして顔がキーワードとも考えられる書店。全てに共通しているのは、そんな顔を見に「来て欲しい」という思い。このZINEは温故知新がテーマの一つとなっているが、スマホで済ませるのではなく、自分の足で「行って・見る」というアナログな過程の大切さを教えてくれたのかもしれない。奥浜の「まち環り」は、Z世代の僕たちの生活を見つめ直す契機となった。モバイルオーダーや電子書籍、安くて手軽な飲み物や家具、簡略化された会話や画一的な空間...どれもが僕たちの世代の初期設定。だが、ここに「唯一無二」のこだわりはあるのか。僕らはリアルさを感じ続けられるのか。奥浜には、まだまだ掘り起こされていない、そして僕らが知らない大切な温故知新が眠っていると思う。

選書や配置のこだわり

そんな書店だからこそ、本のセレクトにもこだわっているに違いない。広報の田村さんに取り揃えている本へのこだわり、本の種類、選定基準を伺ってみた。まずキーワードとして「入口の本屋」を大事にしている点について語ってくれた。「一般的な書店のように作者別に本を並べることはない。また専門的になりすぎない本をセレクトすることにより、あまり本を読まない人でも手に取りやすく、この書店で買った本がより詳しい本への誘いとなることを目指しているという。なにかしと学びたい、知りたいと思っている人が自然と手に取りたくなるような本を、分けて隔てない、偏りのない形で選びたいと語ってくれた。

SPBSでは本の置き方にもこだわっている。縦に本が並び、背表紙のタイトル部分のみを見ることが出来るのが一般的。でもここには、本の情報をできるだけ提示するために、ほとんどの本の表紙やデザインを、見ることが出来るように配置しているのだ。まるで本の「顔」を見せるように。

紙の本の良さ

紙の本が売れない時代。でも、紙の本という「物」にはそれならではの良さがある。「二冊の本が著者だけでなく、装丁全般に関わるブックデザイナー、イラストレーター、編集者など多くのクリエイターの協力と総合的に作られていることを」「手に取って感じ取る」ことができる。また紙の本だからこそ、配置にこだわることもできるのだ。SPBSの店員さんが本棚や本の置き方にこだわったように、僕らも購入した本をどう扱うのかを考えることができる。紙の本はスマホで見るデータと相違して、形や面や質感を持って存在するために、いろんな工夫ができる。部屋に置いてあれば、忘れたけた頃に目に留まることもあるだろうし、おしゃれな表紙の本をインテリアとして置くこともできる。紙の本は情報媒体ではなく、様々な「顔」を持った存在なのだろう。

TOLO PAN TOKYO

駅

前商店街を進むと、閑静な通りのなかに行列をつくっている白い小さなお店を見つけた。「何のお店のなんつ」と近づいてみると、お客さんらしき人たちが続々と「ありがとうございました」といって出てくる。みんな晴々とした表情でピンクの袋を持って踏み入れてみる。温かい香りとともに「はじめまして」のパンたちが出迎えてくれた。

— 何気ない日常に彩りを添えてくれる ベーカリー —



「よし、朝ごはんはここに決めた。じっくりパンたちを見渡す。パンオショコラが目に見えだした。よくある四角形ではなくて三角で、層が本のページのようにながっている。さっそく購入。店外で食べてみる。何層にも重なった生地は香ばしく、図書館で食べたら怒られそう。なほどバリバリと気持ちの良い音を立ててくれる。中心に近づくとビターレートのほろよい量でどさを感じさせず、バターとの調和が絶妙。今までに出会ったことのない衝撃的な美味しさだ。この感情をどうしても伝えたくて、僕はお店に引き返してしまっ



このパンを作っているのはパン二五年の田中シェフ。メニューや美味しさへのこだわりを聞いてみると、「オリジナルじゃないとお金をもらう価値がないよ。その真似をするのは簡単だけれど、自分は作品作りから人生を感じたいと思っています」と田中さん。その真っ直ぐな言葉に心を奪われてしまった。

店名の「TOLO」は埼玉の荒川上流にある長瀬（ながせ）に由来している。会社勤めの方が多い池尻で、駅や家に向かう「慌ただしい人の流れを一瞬止めるカフェ」を設計したいという思いが込められている。たしかに、長瀬の「瀬」は川の流れが緩やかになる淵を表す。長瀬に行ったとき、都会から近いにも関わらず都会の忙しさを忘れさせてくれるのに最適な場所だと感じたそう。これは池尻大橋にも共通する。TOLO PAN TOKYO というお店も、池尻大橋という街も、せわしなく過ぎる日常のなかで、心が安らいで優しい感情を持てる休憩場所である。もつと話を聞いてみたり。



地域を愛し、地域に愛される

田

中さんは地域の人に愛されている。ひとたび店外に出ると、声をかけられ、子どもたちには田中シェフと呼ばれて親しまれている。だから地域にも愛されるようにと、パンの名前を「ヒガシヤマ」「イケギリ」といった地名にしているそう。また、他の人には教えたくなけれど、仲の良い人には教えた。そして、地域の人が自慢できる特別なお店でありたい。地域への思いがこもったパンとお店が、地域への生活に彩りを与えているよう。そんな田中さんに、パン職人としての未来について聞いてみた。すると意外にも、「途上国でパン職人を育てたい」という、そのモデルとなったのは、なんと「エ・ゲバ」だった。ゲバは、貧富格差のない社会を目指したキヨバ革命の指導者で、田中さんが尊敬する人物だ。そこには、パンを通じて人々に「これが豊かなのだ」と知ってほしいという思いがあった。

池尻大橋

IKEJIRIOHASHI

東京っぽくない 都区内の休憩場所



今回の取材先

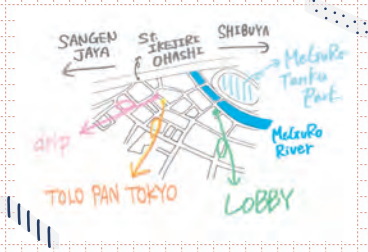
- 01 TOLO PAN TOKYO
- 02 drip
- 03 LOBBY



田

田中さんは池尻大橋という橋は、このエリアに池尻大橋という橋はなく、「池尻」と「大橋」という地名にまたがっているためにこの名称がつけられたそう。渋谷駅にも歩いて行ける場所なのに、どこか公園があり、大橋ジャンクションの屋上を緑地化した「目黒天空庭園」には自然も広がっている。街からは子どもたちの無邪気な声も聞こえてくるので、ここが渋谷に近いことを忘れてしまふ。

東京なのに「東京」っぽくない。上品で都会的な雰囲気なのにどこか親しみやすさを覚える不思議な魅力を持ち合わせた街。今回はそんな池尻で、僕が出会った三つの店舗を紹介。「温故知新」と「環状・感情」という2つのキーワードから池尻のさるなる魅力をひも解いていく。



2世代へのメッセージ



「2世代からは影響を受けることも多いし、これから新しいことを開拓していく人たちだと思っています。妥協してこれでも良いかなと思うよりは、まずは絶対にやりたいことから始めることが大事です。でも、まだそこはゼロ地点、這い上がつていくのは難しいけれど、本当に好きでやりたくてゼロから始めているのなら辛さはないと思います。好きじゃないのにやるのはつらいし、そういう人人生ではつまらない人が育ってしまいます。頭が良いとか悪いではなく、他の人とは違う視点が持てる人になってくれたらいいなと思います。」

東口を出て
商店街へ

TAKU
X
TANAKASAN

TOLO PAN TOKYO
〒153-0043
東京都目黒区東山 3-14-3
Open 8:00-17:00
定休日 毎週火
Instagram tolopantokyo



* ジャジー・ヒップホップ：ヒップホップにジャズを取り入れたサウンド
** アシッドジャズ：1980年代、ロンドンのクラブから流行した新しいジャズのスタイル、古い演奏にリミックスを施してデイスコ風のビートを加えたり、ラップやファンクを混ぜて演奏したりする。

店
内には軽やかなジャズが流れる。ジャズはそれほど詳しくないけれど、普段耳にするジャズとは何かが違う、そんな感じがした。カウンターという特等席を活用して、「ノ瀬さんに聞いてみた。」
「基本的にジャズを流しているのですが、ジャジー・ヒップホップ・やアシッドジャズ・などモダンを取り入れて崩したような曲も、お客様の雰囲気に合わせて流しています」「古いものに新しいものを取り入れる、まさに温故知新ですね。ちょっと背伸びして、思い切った切ってみました。」
「ノ瀬さんの表情が和らぐ。」
「温故知新は、この店のキーワードなんです！メロニーや内装もベールはクラシックなんですけど、プラスアルファでモダンとか変わった要素をワンアクセント入れるようにして、新しいアクセントをたくさん足したくなるんですが、それと自分だけが好きなものになってしまうので、お客様の感性と私の感性が交わるように心がけています。くだりに気づいたら喜んで嬉しいです」初めて入ったお店で、初めて話した大人の方と僕の感性がシンクロしたようで嬉しい。

クラフトマンシップ
話
に花が咲き、プリンとクリームソーダを味わったところで、僕は「よし、今日はコーヒーも注文しちゃおう」と思わず「オーダーしてしまった。」
すると「めっちゃ高価なものではないのですが、食器やグラスにもお客様に楽しんでもらいたく、力を入れているんです。もしもあれば、特別にお客様の好きな器でコーヒーをお淹れしますよ」とノ瀬さん。
粋な計らいだなと思いつつ、僕のフィーリングにマッチしたレトロな器を選択した。カウンターの後ろには本棚「ノ瀬さんおすすめの本が並んでいる。豆の香りとともに、待ち時間店内を満喫する。アートやデザインの雑誌をバラバラとめくっている「お待ちたせいたしました、喫茶店のコーヒーです」と声がかった。カウンターとジャズで背伸びしていたけれど、実は僕はコーヒーが苦手。だからクリームソーダを頼んでいた。でも、そのコーヒーは自然と体に染み込ませていくような味わいだった。そんな喫茶店のコーヒーの自然で大人な味わいに後押しされて、くだりの話も終わった。この今後についても聞いてみた。
「クラフトマンシップを大切にしていきたいんです。でも飲食店というビジネスである以上、一般化・俗化をせざるを得ないという問題を常に抱えています。外注やシステム化したとしても、どこかにクラフトマンシップを感じるものは残しつつやっていきたいです。そうでないと店の良さがなくなってしまうので。」



「店内のお気に入りの場所」とお聞きしたカウンターに誘ってくれた僕は「カウンターってちょっと緊張するな」と思いつつ、チェアに座る。お酒ではなく、メロニーから目に飛び込んできた生クリームをふんたんに使った「自家製喫茶店プリン」とクリームソーダ」を注文。ソーダは天気によって色が青や赤に変化するという、生クリームを丁寧にじっくりと泡立てる「ノ瀬さんの姿がかっこいい」プロの技を間近で見られていいなと発見。「これから席選別に迷ったらカウンターに座ってみよう」と自分の約束が生まれた。

drip
TRACTION Inc. と作り上げる新しい喫茶店
TOLO PAN TOKYOで爽やかな一日をスタートできた僕は、さらなる期待を込めて商店街を環り始めた。すると数秒で、hand drip coffee sweets と書かれた看板とシックな黄色のロコマークを発見。直感が導くままに細い階段を上がって扉を開けると、クラシック（全典）とモダン（現代）が合わさったような空間が広がった。海外の映画で見えるようなしずかカウンターの頭上には、背の高いポトルたちが驚くほど暖かい色に照らされていた。どこに座ろうかと迷っていると、店主の「ノ瀬さんが登場。」



drip
〒153-0043
東京都目黒区東山 3-14-2 東山共同ビル 2 階
Open 平日 14:00-20:00
土日 12:00-20:00
定休日 不定休
Instagram drip_ikejiri



そこには「知らない大人」の「ノ瀬さん」といつの間にか会話が弾んでいる僕がいた。チェーン店ではあまり頼まないコーヒーまで飲んでいる。スマホがあればアプリで人と簡単につながったりできるけれど、知らない人と「コミュニケーション」が生まれるリアルな場所はないかなと見つからない。しかし、（ささ）は店員とお客さん、あるいはお客さんとうような交流を自然と楽しめる公共空間のような喫茶店だと感じた。（ささ）には会社員はもちろん、クリエイター、アパレル関係者、デザイナーなどいろいろな人が来店するといふ。
行き上がった階段を下りて、再び商店街を歩く。「ノ瀬さんの会話を思い出して「ああ、なんかよかったな」と感情に浸って笑く自分は、「ささ」までの僕と少し違うかもしれない。さて、次はどこへ行くのか。

LOBBY

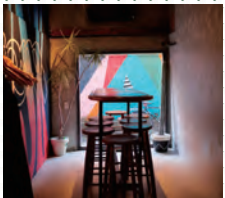


入口

学

生の僕にはバーってハードルが高い。そう思っていたから、なかなか行けなかった。でも池尻大橋で、そんな固定概念を覆す、隠れ家的なお店を見つけてしまった。商店街から少し裏路地に入って進んでいくと、小さく「LOBBY」という文字が書かれているのが見えた。奥まった場所にあるのが見当がつかない。けれど店名がロビーならば、きっとそこには居心地の良い広間的なものであるのではと、僕の感性が刺激される。正面に立つと、開放的なガラスから溢れる光が僕を照らした。そのフレームは、少しレトロな感じのエメラルドグリーン。ガラス越しに店内の様子を観察していると、お洒落な音楽のなかでスタッフとカジュアルにお酒を楽しむお客さんの姿が見えた。なんだろう？この空間は、雰囲気惹かれ、勇気を出して入ってみると、そこには「居酒屋以上、オーセンティックバー未満」の空間が広がっていた。

はじめての bar



店

内にはカウンター以外にもベンチやソファがあり、僕が想像していたバーとは全く異なるものだった。20代の経験に後押しされて、特等席のカウンターに座ってみる。メニューに目をやると「ノルウェーの森 ナッツフォーユー、マティニハの扉」などと書かれている。今まで見てこなかった名前がずらり。僕は初めてのバーに緊張しドキドキしながら「オスメ」を注文してみた。まずはテーブルにコースターが置かれた。部屋に飾ればどんな無機質な空間でもPOPに変えてくれそうだ。

「このコースターはこちらで作られたんですか？」

「LOBBYとつながりのあるアーティストさんがデザインしてくれたんです。こういう小さなところにフックをつくるって会話が生まれるきっかけにもなるので、コースターにはこだわりを持っています」とLOBBY創業メンバーの一人である倉嶋さんが答えてくれた。

「こちらが当店をイメージしたカクテル、『L.O.B.B.』です。ミルクのような白い泡をまとったドリンクが置かれたけれど、味の想像が全くできない。恐る恐る一口飲んでみると、爽やかなハーブの香りとともに柔らかな甘さが広がった。ベースとなっているのはジンで、馴染みのお酒にこんなにも心躍らせるのかと驚いた。もっとお店について、お話を聞いてみよう。お話を一緒に一杯。この店の味と時間を楽しみたいと思い『エルダーフラワーとピンクグレープフルーツ』を注文した。ローズマリーの香りが鼻を抜ける。さっぱりと爽やかでくどくない。『L.O.B.B.』とはまた違った味を楽しめた。

帰

り道、僕はふと思った。「LOBBY」に行ってから普段よりもポジティブな気持ちになっている気がする。とかいっても違う感情の動きがある。かつての僕のように、バーに対して敷居の高いイメージを持っている人たちは、「LOBBY」に行ってみて欲しい。大人になりきれない僕が、いつもより少し大人になれた場所。一人でも友人とでも、気取らずにふらっと入れる、そんな「休憩場所」的な空間かもしれない。

LOBBY

〒153-0043

東京都目黒区東山 3-6-15 エビヤビル 1 階

Open 火水木 19:00-0:30

金土 19:00-1:00

定休日 日月

Instagram lobby_ikejiri



今

日は充実した一日だった。東京の中心に近くありながらも、少しだけ時間がゆっくり流れているような街、池尻大橋。

大人には慣れ親しんだ場所かもしれないけれど、大学生には緊張とドキドキ感があり、新鮮なクラフトマンシップを感じることもできた。

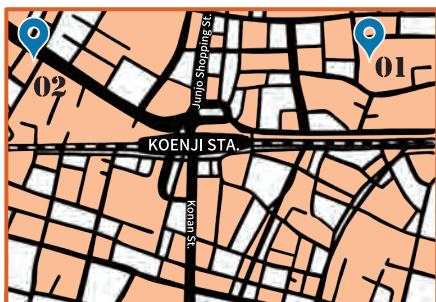
背伸びしても受け入れてくれて、いつの間にか居心地の良さを感じてしまう、そんな空間がある街だった。

「ここ気になる！」とピンときたら、自分の感情の赴くままに歩き始め、その街を環ってみよう。

文化と心の拠り所

高円寺には、一〇を超える商店街が存在する。中央線高円寺駅の四番ホームから見えるのは、高円寺純情商店街。ねじめ正一の小説名にあやかって、高円寺銀座商店街から名前を変えたそうだ。オレンジ色のアーチ、赤いテント屋根、脇道までびっしりと並ぶ店、うるさいほど大きな文字で書かれた看板、呼び込みの声、お店の前で立ち話をする人、遊んでいる子どもたち…。風景と人の賑やかさに、いるだけで自然と元気をもらえる。でも、そこから他の道に入ると空気感が変わる。例えば高円寺駅西商店会は駅の高架下に広がっており、薄暗いながらもおしゃれな雰囲気を感じている。

初めてこの地を訪れた十月半ばは、高円寺四大祭りの一つ「高円寺フェス」の直前で、いたるところにイベントの垂れ幕やチラシが飾られていた。春の大道芸、夏の阿波おどり、秋の高円寺フェス、冬の演芸まつり。各シーズンにイベントがあり、定期的に人が集まる街である。



AREA MAP

KOENJI AREA



◆今回の取材先

- 01 IMAGINUS
02 コクテイル書房 (本の長屋)



未来をつくる杉並サイエンスラボ

IMAGINUS



高円寺あつま通り商店会の脇道に入ると、住宅のなかに学校らしき建物が見える。聞こえてくる子どもたちの声に、幼い頃が思い出されて足が向く。ここは、かつて杉並第四小学校だった校舎をリノベーションし、二〇二三年十月にオープンした科学体験施設「IMAGINUS」だ。「IMAGINE」(想像する)と「US」(わたしたち)から成る造語で、並べ替えること「SUDAMU」(杉並)になる。この名前を思いついた瞬間は、さぞかし爽快だったであろう。この施設では各教室で、ものづくりやサイエンスショーなどの科学体験ができる。この日は休日にも関わらず、「学校」で科学を学ぶ子どもたちで賑わっていた。

エントランス右側にあるデジタルアートブースでは、人の動作に合わせて壁に絵が表示される。思い通りに体を動かす子どもたちと、その様子を見て微笑む大人たち。自分にもこんな頃があったのだな、と見守る私は大人側にいることをしみじみと感じた。

階段で二階に上がり左手に進むと、ものづくりラボが見えてくる。音楽室として使われていたこの教室では、レーザー機を使った木のストラップ作りが体験できる。子どもたちがスタッフに教えられながら取り組んでいる様子を見て、物作りを楽しんでいた幼少期の記憶が蘇り、私も挑戦したくなった。まず紙に好きなイラストを描き、それをパソコンで読み込む。レーザー機のスイッチを押すと、木材にイラストに沿った焼き目がついていく。機械の中から焼ける音と煙が出てきて、作品への期待値が上がる。完成したものがこれだ。



完成したキーホルダー

ものづくりラボのある北棟から、渡り廊下を通って南棟に來ると見えるのは、科学体験ラボだ。ここでは、毎日のようにサイエンスショーが行われている。足を踏み入れた空間は、ショーまでの待合室のような部屋。暗がりの中に展示されている色とりどりの実験器具や、人々を歓迎するように動き出すロボットたちが気持ちよく高揚させる。定刻になると奥の扉が開かれた。ショーが始まるようだ。期待とともに扉の先へ足を進めると、ステージが見えてきた。この空間、実は当初の理想通りには設計できなかったという。その理由は客席側にある柱だ。「本当は正面からステージを見てもらいたいけれど、ちょうど中央に校舎の柱が残っていたので、そこで区切るしかなかった。旧校舎を利用する難しさですね」とスタッフの方が教えてくれた。ショーの内容は、来てからの楽しみ。

ふと立ち寄ったIMAGINUSは、オープンしたばかりの施設だが、懐かしさや安心感に満ちている。学校時代の記憶を受け継いだこの施設だからこそ、童心に帰って科学の世界を素直に楽しめたのかもしれない。校舎の窓に反射する夕日を眺めながら、そんなことを思っていた。



IMAGINUS

〒166-0002
東京都杉並区高円寺 2-14-13

TEL : 03-6383-0290

OPEN : 09:00 - 21:00

休館日 : 第1・3火曜日

年末年始

その他臨時休館あり

#327

本の街について

高円寺の今後についての展望を聞くと、狩野さんはこう話す。
『本の街をつくりたいんです』

狩野さんが考える「本の街」は、本に関する一切が完結する場所。作家が泊まれるシェアハウス、印刷所、書店が揃っている。本を愛する人が集うその街では、本によって仕事が生まれ、働きながら生涯を終えられる。——人の「死」まで考えたコミュニティである。

「人は一人では寂しい。年をとれば尚更だ」。高齢者施設を訪れた際にそう感じたという。本にまつわる仕事を通して、人とのつながりを感じ、社会の一部であることを実感する。それが生きがいになり、寂しさの解消にもなるのではないか。本の街の住人にとって、本は「生きる道標」となる。

本の「人生」とともに、自分の余生を送る。私たちの生きた証は、記憶として関わった人のなかに残る。そして、何より生きた痕跡は「本」が語ってくれる。本の街では、一人じゃないから、安心して余生をも委ねられる。

空想的でありながら、現実を見ているようでもあり、なんとも不思議な気持ちになった。人が溢れる高円寺の地で、賑やかに見える東京にも潜んでいる「寂しさや儚さ」を感じた。しかし同時に、それを受け入れたコミュニティは、私の目には、力強く、魅力的なものに映った。

📍 コクテイル書房・本の長屋

狩野さんのお話

また高円寺にやってきてしまった。駅を出て、心の赴くままに歩いてみる。来たばかりのはずなのに、違う通りに入ると全く違った景色に見える。商店街が張り巡らされている高円寺は正解のない迷路のようだ。細い路地を抜けて大通りに出る。さらに歩き進めていると、道中「高円寺北中通り商業会の中ほど」に気になるガラス張りのおしゃれなお店を見つけた。どうやら古本屋さんのようだ。

店主を務めるのは、狩野俊（かりのすけ）さん。この古本屋さんは、大正時代に建てられた四軒長屋を改装したお店の一部で、二〇二三年六月にオープンしたばかりだ。ここは長屋の西棟で、二階にはイベントスペースがあり、読書会や企画展が開かれている。間に二軒を挟んだ東棟一階には「コクテイル書房」がある。書店と居酒屋を融合したお店で、二階には会員限定の利用スペースがある。この四つの施設の総称が「本の長屋」。本にまつわる様々なコンテンツのあるこの場所で、狩野さんに本についてお話を伺った。

本に関わる活動を長く続けている狩野さん。デジタル化が進み、紙の需要も、本を手取る人も減っているように感じる。そこで「紙の本」の良さを知っていると、「みんな本を読んだ方がよい」と語りはじめた。活版印刷の凸凹「本」ことに異なる紙の質感。本という「物」はその時代の空気をまとっている。そして、指紋や汚れなどの読まれた証さえも、本が「物」として生まれてからの「人生」の物語になっている。私たちは本に触れることで、本の「内容の物語」と、本の「人生の物語」の両方を味わうことができるのだ。物特有の個性差や、それが持つ歴史性は、紙の本だからこそ感じられる。物が語る背景に感情が動かされるのも、人間の面白さだという。

本を読まだけでなく、作り手としての良さにについても聞いてみた。狩野さんは、本を作ることを、「その人自身の人生を残すこと」と表現する。たとえ今生きていないとしても、本が残っていることで、本のなかではその人が生き続ける。本という物の取材は、人間観や哲学といった深いところにもつながっている気がした。やはり「本」は面白い。



コクテイル書房

狩野さんは国立市で古本屋さんを営んでいた。学生のたまり場になっていたそのお店での「料理を提供してみようか」という声から生まれたのがコクテイル書房である。その後、高円寺に移転して今に至る。偶然の出会いと人々の対話が重なって生まれた場所である。



コクテイル書房

〒166-0002
東京都杉並区高円寺北 3-8-13
TEL : 03-3310-8130
OPEN : 昼営業 12:00-15:00
(土日)
夜営業 18:00-23:00
(無休)



狩野さん



#327





長屋通信

本の長屋では大人が「部活」をしている。「本の長屋通信」の制作を手掛けている出版部がその一つだ。地域のお店紹介やエッセイが掲載されている長屋通信「本の長屋通信」が出来るまで」というトークイベントに参加して、制作の裏話を聞いた。

ベースとなっているのは「協働」の考え方だ。資金関係に縛られず、それぞれの得意なことを持ち寄って、何か一つのものを作っていく。『費用を出す側といただく側』という設定には権力・主従関係があるので、物事を非常に進めやすい。だけれども、できるだけそこに命令とか強制とかがないようにするとやはり時間はかかります。そう話すのは、通信の編集長・唯一、出版業界での編集経験があるけれど、他のメンバーに全部指示をするのではなく、ノウハウを共有しながら一緒に考えていくそうだ。まさに学生時代の部活のようだったと思った。うまくいかないかもしれないけれどやってみる。初心者だけれどアイデアをぶつけてみる。ここにはそんな大人の青春がある。



通信は、紙での配布にもこだわっている。ウェブ版だけアクセス数が増えてもしょうがない。リアル書店だからこそ、長屋に足を運んで「縁のある本をどれか一冊買ってもらおう」というサイクルが大切だ。

通信を作るうえで、最も大切な工程の一つが「紙を折る」作業である。A4の紙二枚を半分に折って重ねて、合計八ページで作られている。記事の入稿やレイアウトの相談はメールで行うこともできるが、そうはいかないのが「折る」こと。折る作業を言い訳に、わざわざ書店に足を運んで人と話す。現在は出版部のメンバーだけが折っているが、今後は外部も巻き込んだ「折り会」を開催していきたいとのこと。手間は、人と人を結びつける可能性を持つ。

本の長屋通信はゆっくりだ。作るにも、手に取るまでも、時間がかかる。だからこそ、手に渡ったときに記憶の「重み」を感じるのかもしれない。

ネットで、いつでもどこでも人とつながれるようになった。常に新しい情報にアクセスできるようになった。そんな時代に問いたい。物の価値とはなんだろう。

高円寺で見てきたのは、偶然に人と人をつなぐこと。その偶然はどこから生まれるのか。実は意外にも、物からなのではなかろうか。その物がそこにしかないからこそ足を運ぶ。学校や長屋といった建物が残され、本や紙という物が存在する。それがあつ場所に行き、そこで出会い、それについて話す。見えている物の背景には隠れた物語＝歴史があり、その記憶を解き明かす過程で、知や想いが共有され、知らなかった世界が浮かび上がる。その世界を知った途端、その物への愛着が生まれる。

商店街の街、高円寺には確かに物が存在していた。何度でも足を運んでしまうのは、高円寺にしかない物が持つ「世界」を知ってしまったからだろう。一歩踏み込んで、隠された物語を探索しよう。いつもの帰り道、ずっと気になっていたお店、誰かが書いた本、あの町を歩いた靴…。日常はきっと愛すべき物で満ちている。



藤原さん

藤原さんのお話

話を終えて本棚を眺めていると、再び狩野さんが声をかけてくれた。「まちづくりに興味があるなら、面白い人がいるよ。話を聞いてみたら」そういつて紹介してくれたのは、藤原玄明（ふじわら げんめい）さん。大学で専攻していた建築学の観点から都市の歴史について研究している。狩野さんが語った本を通じたまちづくりとは違う、「建物」という観点、大学で

文系の学問からまちづくりを学ぶ私にとって、また新しい世界に踏み込むような気がして、ワクワクした。

都市の歴史について研究していた藤原さんは、建物の消失とともにその歴史が風化してしまうことに問題意識を持っていた。企業に就職して社会に関わっていたなかで、歴史をアウトプットしていくことに社会的意義を感じ、都市の研究を事業にすることを決めたという。現在は高円寺を中心に活動をしている。

「今いる長屋はどこかというところ…」そういいながら見せてくれたのは、何枚かの紙をつなげて作られた高円寺の地図。藤原さんの活動で実際に使っているものだ。その活動は非常に地道である。まずは大正期から現在までの高円寺の街並みに関する資料集め。区内の図書館を中心に足を運び、当時の建物や戸籍データ、ときにはインターネットに当たった。高円寺に昔から住んでいる人や、当時の情報を集めている人にインタビューすることもあった。そして、集めた情報を地図に書き込んだり、パソコンで可視化したりして、データベース化していく。バラバラに残る「記憶」を藤原さんが紐づけていき、かつての街を再構築する。

藤原さんは、このデータベースを活用し、ゆくゆくはアプリを開発しようと考えている。高円寺の歴史を知ることのできる「街を時間軸で旅する」アプリである。それを持って街を歩くと、周辺の建物の昔の様子や当時の人々の暮らしが分かるというものだ。「現在」にしながら、その場所の過去から現在に至るまでの変遷を知ることができる。アナログな方法で得た情報を、デジタルな方法で発信しようとしている。



「『古いからいいよね』だけではなく、文脈がわかれば愛着が湧くのではないかという期待があります」
ふと、「文脈」という言葉から本が連想された。本に文脈があるように、建物という「物」にも刻まれている物語や歴史があるのだ。そういえば、E-story は冒頭の二文字を取れば Story になる。
今は、インターネットで検索をかければ、授業の参考文献はもちろん、瞬時に膨大な量の地図や画像が出てくる。でも、人を通じてしか得られない情報があるのは今も昔も変わらない。会話のなかでの表情や言葉遣いから、大切にしているもの、こだわりの垣間見える。人それぞれ過ごしてきた時間が違うからこそ、対話を通してその人が紡ぐ言葉に引き込まれ、もっと聞きたい、もっと知りたい、と感じるのかもしれない。これこそが、「人間という物」がリアルに出会って行くコミュニケーションの良さなのではないだろうか。物質的共存がもたらす化学反応である。
本の長屋をあとにして、少し歩いたところであつ道を振り返ると、なんだか景色が違って見えた。背景の物語を知った本の長屋は、もう私にとって愛着のある場所である。

ふと高円寺駅からここまでの道のりを思い出す。きつと現在の姿になるまでに紆余曲折もあったのだらう。今はまだ知らないこの街の歴史を知ることができたら、この街並みはもっと鮮やかに私の目に映るかもしれない。そんなことを考えながら、駅へ向かった。

Editor's Note

『東京環状(TOKYO EMOTION)』の Philosophy

Anri Gon, Rikkyo Univ.
info@gon-rikkyo.com

この ZINE のテキストとしての強度、すなわち学術的意義を確認するために、古典の引用から始めよう。アーレントは主著『人間の条件』で次のように述べている。「世界は人間が作った物...に関係し、人間に作られた世界で共住する人々のなかで生じる出来事にも関係する。世界で共生することは元来、テーブルが座っている人々の間に位置するように、物の世界がそれを共有する人々の間にあることを意味する」(HC: 79)。

「世界」を「まち」と読み替えてみよう。「まち」には職人が作った「作品」としての「物」が、それについて語り合う「人々」が、人々が集う「空間」が存在するはずだ。だが今日、そのような物は存在し得るのだろうか。知り合いでも他人でも SNS つながりでもない、「まちの人々」と語り合う機会と場所はあるのだろうか。

以下では、この ZINE を読解するためのキーワードを解説する。ワードはエリアごとに提示されているが、ZINE 全体の理解を助けるものである。また同時に、Z 世代が「まち環り」をするための道標でもある。

温故知新 ～全体テーマ：広義の Renovation と、ほぼ同義であると考えたい。それはまず、いわゆるリノベーション、つまりは古い物に手を加えて新しくすることを意味する。他方で Re-Innovation、つまりは既存のイノベーション（物・技術・発想...の刷新）を発見し、それに応答することを意味する。

Emotion ～全体テーマ：哲学では伝統的に感情は理性の下位に置かれてきた。感情を理性で制御することで善き生や理想の世界は実現する、と。だが例えば、Z 世代がいう「エモい」は単なる流行から脱して、温故知新に誘う心の動きともなり得るのでは。ただし他方で、「炎上」なる現象が示すように、感情は両義的である。感情を重視しつつも、それを教養で裏づけることが必要になる。

編集後記

橋 ～**日本橋**：人々がつながる形式を研究したジンメルによれば、橋は「結合と分離」を象徴・可視化する物である。橋はアーレントのいうテーブルに近い。それがあから結合できるが、結合は分離を前提とする。人それぞれだから語り合い＝シェアが必要になるが、相互理解の可能性が皆無ならばシェアの意味はない。

物・物語 ～**清澄白河**：人々の思考・思い・想い...といった「生きた精神」は、「物化」によって可視化／触化する (cf. HC: 266)。つまり、物(作品)として「まち」の存在者となることで公共化するのだ。建物や本、工芸品を含めた物には、作った人のみならず、関わった人の「生きた精神」が歴史として刻まれている。その歴史は、物にこだわり、語り継いでシェアする人々によって「物語」としてリアリティを持ち得る。

唯一無二性・顔 ～**奥渋**：物には「一つしかない」という意味での「唯一無二性」があるが、その特徴を擬人化して「顔」と表現できる。物には顔があり、物がある「まち」にも顔がある。物と対照的なのが消費財。同質／同形で、consume(消費・消耗)の対象となる。消費財とチェーン店がひしめくマちは匿名性を特徴とするが、それがZ世代のデフォルト。そこに顔はないが、それゆえの気楽さはある。

休憩 ～**池尻大橋**：Break とも表現される休憩であるが、何が中断されるのか。ヒントは余暇という言葉である。余暇は古代ギリシア語でスコレー。スクールの語源であり、「日常」から解放されて語り合って教養を積むという含意がある。スコレーとしての休憩を可能にする場所は、「まち」の公共空間となる。

死・記憶 ～**高円寺**：「死すべき人間」の一生を超えて存在し続け、人々の活動の歴史≡物語が語り継がれる時空間こそが「まち」である (cf. HC: 8-9)。それは、記憶媒体である物の集積から成る記憶装置。「まち」は過去と未来の人々を、現在に生きる人々と分離しつつ結合する「橋」でもある。

Arendt, H, 1958(1998), *The Human Condition*, The Univ. of Chicago Press. HC と略記。
Simmel, G＝北川東子(監訳), 1999, 『ジンメル・コレクション』ちくま学芸文庫。

が全然違う。今回のプロジェクトに携わらせていただくことで、改めてそれを体感しました。

坂さんの目線からは現代の「東京」って何を感じました？

坂：東京は特に人にとって便利に作られているので、外観とかは日々変化していきますよね。だけど、そこに住む人たちの「この街を大切にしたい」という想いというか「故郷を想う」といった心は変わらないんじゃないかと感じました。街歩きや見ただけではわからない、そこにいる人に触れて初めてその街を知れるのかなって。

前川：東京はいろんな人が環るんで、第三者からはそこで暮らすという感覚をあまり感じないでも、深く入ってみるとそこに根付いてる人たちがいる。その感覚は今聞いている面白くないと思いませんか？

坂：僕も最初は「東京には地元愛はないよみたい」に思っていて。人が多いからそのバイパスは薄れて埋もれているだけで、住んでいる人に聞けば地元愛はちゃんとあるんで。

権：東京を環る最初のきっかけは丹精込められたアイテムや家具、お店のような「物」だと思っただけで、自分が「綺麗だな、いいな」と思ったところから入り、最終的に坂さんが感じたような人々の「想い」に繋がっていき。そういう意味で、ネットで簡単に手に入る情報じゃなく、質感・質量のある情報で「ZINE」が出来上がる、すごく嬉しかったですね。

前川：スマホひとつで多様な情報が得られるこの時代に、取材を通して「環る」というのは、そこにある「本物」を探すきっかけになったんでしょうね。

情報というのは「感じる」ものでもあるということをゼミ生の皆さんには「東京環状」の制作を



通して今後も体験してほしいですね。その際はぜひ疲れないシューズ、NBを履いて取材に行っていたらいい(笑)



もれない。だけど、やっぱり学生が好きなNBさんという企業と一緒に、皆でシューズも揃えて…となると、ワクワク感が全然違う。そういう気持ち上がる取り組み、スタイリングという形が、学びにおいて想像以上に大事なことになる。今回学生たちの姿を見て実感しました。

次世代にも繋がるプロジェクトに

前川：ゼミ生の皆さんが取材を通して何を「エモい」や「新しい」と感じ、それをどう可視化していくのか、個人的にこれからも楽しみにしています。

坂さんの後輩がこのZINEを手にとって「先輩たちがやってきたものを自分もやりたい」と思ってくれたら、ひとつのゴールなのかな、戻ってきてくれるという表現が正しいですね。それが今回のテーマである「環状」そのものですか。

このプロジェクトが続いて、10年後に「原点はここだったんだ」とみえない会話が出来るとそれこそエモいですね。

権：その通りで、今回サポートしてくれた今の2年生にもZINEの制作体験を繋ぎ、成長してほしいと考えています。通常のフィールドワークでも同じ内容は出来るか

校了した原稿を手に取り前川：ようやく完成しましたね。お疲れ様でした。

CROSS TALK

権 安理
立教大学
コミュニティ福祉学部
コミュニティ政策学科
准教授

坂 信孝
立教大学
コミュニティ福祉学部
コミュニティ政策学科
3年

前川 貴宏
株式会社ニューバランスジャパン
マーケティング部
オムニチャネルマーケティング課
マネージャー



お前日のNBシューズを履いて



ゼミ生それぞれのお気に入りの一足



取材先でのひとコマ

CROSS TALK

「東京環状」本編を校了した2月某日。
本プロジェクトのサポーターであるニューバランス
ジャパンの前川氏を訪ね、構想からの約1年を振り返った。

校了した原稿を手に取り前川：ようやく完成しましたね。お疲れ様でした。



作の過程でこれまでの仕上がりはイメージされていたのですか？
権：なかなか出来なかったですね。コンセプト通りオシャレじゃないかなって人に伝わらない意味がない。学生はレポートなどで普段文章を書いてるんですが、今までは書いて終わってたんです。おそろしく初めて「読む人はどう捉えるんだろう」という目線で見直しを繰り返して、修正を重ねたんだと思います。

坂：取材内容を文章に落とし込む工程が大変でした。感じたことを文章で「人に伝える」というのが、改めてこんなに難しいのか。

前川：でも、綺麗にまとめたなと感心して、ブレなかったのは軸として明確なテーマがあったから？

坂：そうですね。迷ったときは都度「世界一オシャレな教科書」というコンセプトに立ち戻りました。意見が割れてもそれは過程で違っただけで、結局は同じ結果にたどり着く。色々な意見はあるけど、だったらこっちの表現がいいよね、みたいな感じで。

前川：権先生は制作において何が一番大変でしたか？

坂：取材内容を文章に落とし込む工程が大変でした。感じたことを文章で「人に伝える」というのが、改めてこんなに難しいのか。

前川：でも、綺麗にまとめたなと感心して、ブレなかったのは軸として明確なテーマがあったから？

前川：でも、綺麗にまとめたなと感心して、ブレなかったのは軸として明確なテーマがあったから？

Z世代が感じる現代の「東京」
前川：最初にタイトルが「東京環状」と聞いたときに、「正直」「どういう意味？」って思ったんですよ。ただ、組み上がったZINEを読んだら「帰る場所がある」「環状」と「感情」のダブルミーニングとして上手く繋がっていき、すごくびっくりなネーミングだったんだと感じました。

それから、物事の「感じ方の違い」がとても印象的で。例えば僕は20代、50代と世代が違うので「レトロ」という言葉ひとつとっても感じ方

Store List @ 東京

ニューバランス原宿
ニューバランス銀座
ニューバランス六本木 19:06
ニューバランスお台場
ニューバランスニューマン新宿店
ニューバランス玉川高島屋S・C
ニューバランス池袋 P'PARCO
ニューバランス吉祥寺
T-HOUSE New Balance



new balance

